
智将の平平凡凡の息子

模造堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

智将の平平凡凡の息子

【Nコード】

N1486BA

【作者名】

模造堂

【あらすじ】

平平凡凡の容姿を持ちながら智将と謳われた父を持つ次男坊、跡取の兄の補佐官から地方の辺境領主に格上げ、何故って？
国王に言った戦争は嫌いですってね、あの時の国王の顔は傑作。
今は内政に尽力しますか

第一章終戦と領地（前書き）

内政系って難しいですね。お暇な片暇潰しに読んでください。
アンチチート、アンチハーレム、立場逆転劇。
ここまで来ると平凡な容姿から嫁さん居らず

第一章終戦と領地

第一章、左遷

座右の銘戦に勝利は無い、あるのは残酷な現実のみ。

二十歳の青年が一人帯剣し荷馬車に揺られていた、彼は智将と謳われた父の次男、本来なら軍務につく筈だった。

敗走する友軍を纏め上げ、追撃してきた敵軍を囲み三方向から攻撃した事から敵軍は敗走し、また多くの騎士や兵が死んだ事から、これは勝利ではない偶然の引き分けであると宣言し、戦好きな国王の謁見で率直に戦争は好きではありませんと答えた。

晴れて軍務を解かれ、褒章として辺境の地を与えられた。

誰がどう見ても左遷である。

だが本人は喜び、そして街道もろくに整備されていない隊商の護衛として旅をしている。

幸い隊商は襲われなく目的の町に付いた。

後続に傭兵団がいる怪訝に思ったのか青年が見る、敗戦から引き分けに持ち込んだとき真っ先に指揮下に入った傭兵団だ。

「久しぶりだなグレムリン」

「お久しぶりです旦那、国王から左遷されたと聞いてやってきましたぜ」

「なら手伝え、もちろん金は払う」

「そんなんじゃないや有りませんぜ、騎士団に入れてもらおうかと」
「出世払いか、まあいいさ傭兵の伝手を使って奴隷商を集めてくれないか」
「出来やすが、奴隷じゃなくて奴隷商ですか」
「自然に奴隷も集まると言うわけだ」
「まあ旦那の考えている事は大抵分かるんですが」
「上手くいくように頼むぞ」
「了解でさー」

一ヶ月の空白は剣士として振る舞い、酒場で安いエールを飲むだけ。

奴隷商が数千集まり、奴隷は十万を超える、それを傭兵達が睡眠薬の入った酒を配り、宴会の後奴隷商は全員縛られていた。

奴隷を買い取った形にして、合法的ではないが、暗黙の了解で奴隷商を逆に奴隷として農村に分配した。

そして行政官の逮捕、そして背後の拷問に近い尋問、証拠から、行政官の背後を呼びつけた。

「私に用とは？」

「これです」

証拠の写しを出す、元幕僚だつアウロウが見せてみると、顔色が変り。

「それは、幾らかかな」

「1000億」

「払えるわけ無いだろう、100万でどうだ」

「まさかと思いますが、背徳ではないですか大司教殿」

「それは」

「いずれ役立つと思いますので生かしますが、よくよく考えた方が身のためですよ、連れて行ってくれ」

「了解です、一度聖職者の豚野郎をこうしたかったんですよね」

嬉々して傭兵たちが連れて行く、もちろん誰もいない牢獄の独房だ

一通り悪辣商人達から搾り取った資金と行政官の財産、奴隷商の財産から、奴隷達に町での戸籍を与え、殆ど解放したに近いが帰る場所の無いものが殆どだ。

その為、急いで解決しなければならないことが決まった。

種族ごと分け、特にエルフ系が多く、傭兵団を使って村々を作ったエルフ系が農業に向いておらず、獵師に向いていたので森の勤めとして移住させた。

それでも一万もの余剰人口を抱え、彼らを騎士団に編入させた。

地方領主が一万もの騎士団を維持できるわけも無く、食料のみで我慢してもらい、緊急策として会議を開いた。

「使えない連中ばかりだぜ」

「そうか、なら塩田を作ろう、それも村々に使える物だ」

「どういうことですか」

「要すれば塩田の普及だ」

「出来やすかねえ」

「違うな、出来るようにするのだ」

「余っている人員を導入するつきやねえか」

幸い塩田の知識を持つものがいた為に、直ぐに塩田が作られ、村々に普及した。

その塩田の適した土地に漁村を作り、騎士団から向いていない者を住まわせる。

結局残った騎士は千名、元々そのつもりだった傭兵団員、使える人材として残された者に分かれる。

奴隷商を集めたのは行政官にして、その後は青年の手柄になった。もちろん多くの人々の支えも合って。

国内から奴隷商数千人が消えたために、奴隷を欲しがっても手に入らない状態になった。

当然行政官が集めた奴隷商の行方を探れば青年の領地に当るが、公爵家の智将と謳われた当主の血を引いた天才的な智将、若き鷹と呼ばれる青年になるのでおいそれと手出しできない。

今回は納税なしで、代わりに屯田兵制度を持ち込んだ。

当初は物議を醸したが、制度の説明がちゃんと届くと志願者が現れ始めた。

「ではこれでいいな」

話した内容は村々の余った農畜産物、農作物、漁村からの塩、塩漬けの魚、様々な食料品を町に一回集めそれから売買して隊商に運んでもらう事になった。

読み書き算数を教える小学校、さらに高度な学問を教える中高等学校も決まり、魔導士ギルドの創設も決まった。

一年と言つ月日があつたという間に過ぎ去つた。

今年からの納税は課貨幣で、治める額は村の総収入から引かれる、それだけ村々の生活は良くなり、豊かな農地や、農畜産地、林業等の第一次産業、二番目が工房等の第二次産業、宿屋などの第三次産業、どちらにせよ急激な人口増加から餓死者が出る可能性も有つたが、奴隷だつた者は、よく耐えて二年目を向かえた。

村々に自警団を発足させ、屯田兵と同じく予備兵力の位置づけで多少の賃金を与えた。

おかげで自発的に盗賊退治、街道の整備、連絡網の整備、村の防御策の城壁に砦を作つていった。

二年目は役三割で、それでも膨大な資金が税収として入る、それを予算付けるのは幕僚だつた家令のアウロウと領主の仕事だ、一生懸命予算付けして、一般的な領地運営と異なり大量の所謂公務員を抱えている上に軍備も馬鹿にならない。

そんな訳で大半が維持費に消える、その中から魔導士ギルドに寄付し、残つた資金で新事業の酒造に取り掛かる。

酒を取り寄せ貴重な砂糖と果実を天日干し、裏表一時間ずつ裏返し水分を蒸発した物を酒につけ砂糖を入れ、乾燥果実を入れそれを繰り返し最後に砂糖を入れてビンに詰めて暗所に入れ後は待つのみ。

この技法が使えるのは南国の辺境で、果実と砂糖が取れる地方ならではだ。

貨幣の総収入から公務員以下に支払われた賃金が領内で消費され、それがまた庶民の手に渡り、庶民から所得に応じて納められる税金、特産物からの高値で売買される甘い果実種、試飲で好評をばくし今では王家に献上する一樽になった。

僅か三年で辺境を黄金に変えたと噂されるほど好評だ。

辣腕の前に彼は智将で仁に厚い性格だったから部下達が支えた、
絶え間なく働く彼に強制的に休みを与えろと言う家令直々の命令だ
った。

第一章終戦と領地（後書き）

評価、感想をお持ちしております、お気に入りに入れてくれる幸いです

第二章、家令と団長と巫女

第二章

最前列が崩壊した、後は総崩れの様に出走する、その中グレイス殿だけは指揮をとっておられた、次々と戦列が盛り返し、敗走から立ち直り始めると今までに無い戦術を使った。

戦列を組み戦いあうのが一般的だが、わざと最前列を後退させ、後ろの戦列を左右に分ける中央突破されると思いきや、両脇から絶え間なく、戦列を抑圧する。

長い時間左右の攻撃、最前列の退かぬ踏ん張り様。

私はこの青年に仕える事が天命に思えた。

それ程長くはかからなかったのが時間だが、私には長い時に思えた、敵軍が後退すると最前列を進ませ両脇から攻撃する事を止めない、そして敵軍の士気を完全に失墜させて追撃を行わなかった。

何故かと思えば兵達の骸、悲しい事だが過酷な戦場で倒れた兵、見事な戦術を最初から使えば勝てたが、それを使わなかった狭量が仇になった。

指揮官一人でこれほどとは思わなかった戦だった。

国王は追撃だと喚いておられたが、誰も従わなかった。

そつ貴族すらである。

軍はあまりに満身創痍だった。

それが分かっておられない国王は戦好きと言うより単なる戦馬鹿
一大だ、それも狭量で才能なしで、人徳も無い無能王が適切だ。

青年がその気になれば国王の首は離れていただろう。

青年は言った戦に勝利はない、残酷な現実が目の前にあるだけだ
と。

そして威厳ある声でこう言った、帰ろう故郷へ

それがいかに将兵を動かした事か、もう国王に従う者はおらず、
皆野戦病院で怪我の治療、戦友の見舞い、これで戦は終わったと喜ぶ
兵士、長かったと話す古将。

青年の説得により殆ど脅しに近かったが、国王は戦を止めた。

もはや国王に従う将も兵も居なかったからこういえる、世代交代、
時代は必ず変わる、時が流れを止めないように、悠久の時も流れる
ように。

国王の権威は失墜し、国王に代わって和平派の王女が位につく前
に国王が青年に褒章をやるうといたら

「戦争は好きではありません」

国王を否定するかのような言葉だった、故に褒章は南国の边境の
地が与えられた。

そして王女が位につくと交易による平和が始まった。

私は青年を追い、行く先々で剣士の噂を聞いた、どんな相手も一撃必殺で武器を破壊したと。

青年がやったとすれば頷ける。

青年の策を使わなかった国王以下幕僚は隠居生活になり、青年の兄は公爵家を継いだが、人気は全く無い、青年が地方に飛ばされ本人は複雑な気持ちだろう。

地方に飛ばされ向かってみれば奴隷商の集まり違法は当たり前でも暗黙の了解で行われている裏家業だ、それは行政官が飛びつきりを買集めると聞いてきたらしい。

どうもおかしい青年はとうに赴任している。

となると青年の掌で嬉しそうに踊っているに近い、いや踊っているのだろう。

翌日傭兵達に酒を振舞われ、間違いなく睡眠薬入りだろうが、予想は的中し数千人の奴隷商が捕まった、そして行政官の逮捕、おかげで国内の奴隷商は一掃され、十万人もの奴隷が買い取られる形で解放された、あとは知ってのとおり青年に仕え家令になった。

俺は信じられない事を色々体験した、しかしだこれほど不可思議な事は無い、魔法でも使ったのかと言いたいくらいだ。

何故って？

戦列が崩壊して敗走している時にこれは勝機だと言って指揮を始

めた坊主が居たからだ。

二十歳そこそこの平平凡凡の容姿、ここまで来ると特長だ。

修羅場を潜ってきた煉獄と言われる俺達傭兵団がたつた一人の青年に従って戦列に戻ると、敗走していた者達が戦列に戻ってきた、次々と指示を出し四万もの将兵を纏め上げ、いきなり反撃に出たかと思えば退かせた。

奇妙なと思つたら分かった。

両翼に戦列からずれた兵士達が立ち並び始め、敵は中央突破を狙つたが悲しい事に坊主の掌で血塗れになって踊っていた、まんまと策にはまり、左右からの口陣で敵軍は中央突破と叫びながら戦列が次々と崩壊していった、敵軍もさることながら両脇に兵を出そうとするが密集が仇になり戦列が組めない、その為に敵軍は混乱の中敗走した。

本来なら追撃だが、無理難題とつて言っても過言じゃないほどの死傷者だ。

最初から坊主の策を、採用していれば勝てたものをと、つい零してしまった。

部下も同じらしく、無能な国王以下上層部の馬鹿共が、と叫んでしまった。

普通なら咎められるが誰も止めなかった、むしろ同感の様に頷いていた。

これほど人徳の無い国王も初めてだ。

坊主は言った、帰ろう故郷に

生憎俺達傭兵には故郷は無い。

だから賭けた坊主に。

賭博は大嫌いだ、王都の門で昼寝をしていた、そして隊商の中に坊主を見つけ、千人居た煉獄傭兵団はいまや五百名、半分に減ったが強さなら並みの騎士団では勝てないほどに強いと自負している。後ろから隊商に化けて追いかけた。

道中盗賊団を潰しながら追いかけて辺境中の辺境に付いた。

そこで坊主に出会った。

坊主は覚えていたらしく早速仕事を依頼した、将来騎士になるなら安いものだ。

しかし国内の奴隷商を全員集めるのは一苦労、それを誤魔化すのも一苦労。

その甲斐が実ったのが酒を飲ませた時だ。

安心して眠りに入り、衛兵と一緒に縄にした。

衛兵も新しい領主が英雄と呼んでもおかしくない坊主だと知ると胸を張って仕事をしていた。

それから行政官は刻み殺したくなるほどの反吐だった。

一応生かしておくらしく独房に突っ込んだ。

その黒幕もぶくぶく太った大司教、笑える豚だと思ったが坊主のあっさりした証拠で、やはり生かしておくらしく独房行き。

それからは大変だった元坊主の父親の幕僚だった貴公子のような美青年と急ぎ、約十万もの奴隷達の行き末だ、はっきり言って故郷なんてものを期待するものは居ない、何故なら村事襲われ男は皆殺

し女子供を奴隷商に売り飛ばす、それが盗賊のやり方だ。

案の定誰も帰れない、多くがエルフだったために、団員が指揮をとって開拓に辺り木々を切り倒し何とか住居は出来た、九万ものエルフが住む森なら誰も手出ししないだろうが、農業が出来ず、狩人になり森の草木を食べるらしいが、これだけのエルフが食べばどうなるやら。

残った一万人を騎士にして食料だけで塩田を作る事になり、幸い作り方を知っていたものがいたため、直ぐに塩田は普及し、一万もの騎士団から千人に減った。

残りは新しい村や漁村、新しく入る村などで淡い希望を抱いて領内に散っていった。

しかしだ、今の俺は騎士団長、千人を束ねる騎士だぜ？出世したほどにも凄すぎるが。

辺境には独自の権限が多い、その分が税收である、それが一度無税、次は貨幣、本当に税が納まるかその日まで酒浸りだったぜ。

無学な俺には分からないが、家令の奴が言うには、統治においても天才的で心優しいと。

それは分かる、年俸が支払われ、今年はこれで我慢してくれって傭兵団が一つ雇える金額を貰った。

知っている傭兵団に伝えると直ぐに向かうと返事が来た。

信頼できる傭兵団に伝えたために、それ以上は増えず村々の警備

に付いて毎日の様に盗賊団探し、探したら捕まえて宝の山分け。

盗賊は法に則り裁判にかける、一々殺しては減りやしない。

エルフの族長の悩み。

いきなり九万ものエルフ、それも多種多様なエルフを纏めると言われた。

はつきり言おう無理だ。

しかしだ、奴隷から解放してくれたあの見た目に反して、切れ者の人間で言う青年の男性には確かに恩がある。

主にダークエルフ、ハイエルフ、ウッドエルフ、スノーエルフ等が大半の揉め事だ、それを一々仲裁しなければならぬのが悩みの種の一つだ。

いつそのこと逃げ出そうとしたら捕まえられた、ハイエルフでも希少な精霊界を通る道を開く事が出来る巫女なのだ。

勤めが数千なら分かるが、九万なら国と一緒にだ。

おまけに狩りで得られる、獲物も少なくなってきた。

後は草花、木の実を食べるしかないです。

思いつきり食糧難です。

だから手紙を書きました

第二章、家令と団長と巫女（後書き）

なんか最後がかわいそうになりましたが、評価・感想などよろしければお待ちして降ります

第三章、計簿は黒字でも維持費が大変なのに。

第三章

「グレイス様」

「頼む、眠らせてくれ」

「いえ手紙が届いております、エルフの巫女殿からです」

「はて、なんだろ、ああそうか」

「読まずに分かるのですか」

「古人曰く衣食住足りて人は礼節を重んじる」

「つまり衣食住の食が無いのですね」

「九万ものエルフがいれば致し方ない、余った農産物を送ってくれ、彼らも大変だろう」

「分かりましたが、読んだほうがよろしいかと」

「分かったよ」

手紙には九万もの多様なエルフを纏めるには困難すぎる、ついでに食料が足りません、衣類も足りません、水も大変です

「ありやりや」

「何と」

「愚痴と再整備計画の要請」

「無計画に立てましたからね」

「水も足りないよ」

「はあ？水、これほど豊富な水がたくさんあるのにですか？」

「生活廃水」

「なるほど」

「まさか熱帯雨林に都を作らないといけないとは」

「都ですか」

「それが一番だ」

無計画から計画的な都市作りを初め、エルフが衣食住だけで協力しているのに、材料と地方領主では信じられない巨額の費用を投じ、上下水道、工業排水を分けた。

エルフは総じて夜目が利くので、見張り台で済んだ。

半年かけて完成させ、エルフの都にして人間は定住できない法律を作った。

エルフも食糧問題に頭を悩ませ、特産品の作り方を教えた、今度は初期費用がかかり、エルフの精霊使いが騎士団に所属する事になった、損得を考えれば釣り合わないが、エルフが大量生産すれば特産品も増えるわけで経済投資の一面がある。

そうして24歳で莫大な利益を上げる領地にした。

それから功績を認められ、州の総督になり、他の貴族も運営しなければならなくなった。

その為、功績を認めたと行って伯爵まで爵位が上がった。

言つなれば親会社の王家より、支部長から子会社の最高責任者になった訳になる。

他の地方貴族からすれば不満があるかと思えば、逆に歓迎され勘繰るほどに。

州はロウと名づけられており、半分無法地帯だ。

今まで村々を警備していた傭兵団を雇い、屯田兵と自警団に治安を任せ、直轄地は家令に任せ、まずは他の領地の再整備と、村々を治める領主の世襲制の廃止、村長の世襲制の廃止、領主に求められるのは領地運営、騎士としての努め、治安維持、ましてや民に害する行為はもつてのほか、地方領主は困った程度だが、世襲制が廃止

された領主は途方にくれるしかない、今まで散々搾取してきたのだから。

中世に出てくる様々な特権は無くなり、統治と徴税と司法に立法のみ、後は騎士としての能力が求められる。

まずは調査から初め、エルフの狩人も参加させてどんな再整備計画が必要か、それを調べさせて総合的に合理的に地方領主の方の町を都に変える、同時に街道を整備して盗賊退治、港町になりそうな所は住民に説明して整備していく。

そんな再整備計画を行い、灌漑も行い州全域に水路網を広げ、貿易船が止まれるような港町も作ったのは後の事。

困った難題は、纏める下級貴族の領地からの納税は貨幣ではなく、作物や塩漬けにした魚で、中には木材もある。

直轄地の制度を提案し推し進めた、その結果丸一年で貨幣による税収に変わり、今まで見たいに相場による乱高下はなくなったが、総額的に税収が落ち込んだ。

来年になれば増えると何とか不満を先送りにして、貿易港を共同運営に持ち込んだ。

カーウェイ家、ラトウイ家、ボカロイド家と俺の直轄地を合わせ四地方。

三家と話し合いをもつことにした。

「御三家がいらつしやいました」
「分かった」

政務室の椅子から立ち上がり、客間に移動する護衛の三家の者が居るので挨拶し中に入った。

「皆様お日柄もよくご足労ありがとうございます」
「何を言われます総督殿」
「そうですね総督殿」
「戦のときは痛快でしたな」
「皆様戦に参加した事が？」

部屋に居る貴族の当主と騎士団長がうなづく。

「その際はありがとうございます」
「いえいえ戦好きな上に才能なしの国王には、愛想がつきましたから」

「私もです」

「ワシも」

「なら話が早い共同騎士団を創設しませんか」

「自前の騎士団では治安維持が心もとないと？」

「確かに嬉しい話ですが」

「ワシは賛成じゃ」

「まあ話の続きを聞いてください共同騎士団とは四つの騎士団からそれぞれ選んだ者を参加させ、領内に留まらず四地方全域の治安維持を行うまさに共同騎士団、それにより身動きが楽になり飢饉の際、水難の際、盗賊の際の援護になります」

三人は考えたようでその後承諾した。

人選はそれぞれに任せ騎士団長には総督が二票、三家が一票の合計五票で決める。

それが発足した一カ月後また集まり団長選びになった。それぞれ団長を立てグレイスだけ団長は女性だった。

騎士団で女性は珍しくない、理由は戦死した貴族や平民出身者が多く、運良く生き残っても女性が多かった。

「ふむ、私はそちらの女性にしよう、何せグレイス伯の人選だ」

「確かに手が騎士の証ですな」

「ワシは少し聞きたい劣勢のときどうする」

「はい守備に徹して弓兵で削ります」

「用兵とはいかに」

「疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山、（疾はやきこと風の如く、

徐しずかなること林の如し、侵略しんらやくすること）おかしかすめること（火の

如く、動かざること山の如し）の動く事です」

「風林火山か昔読んだよ」

「敗走の時は情けなかつたですが」

「良い騎士じゃて、そこでなんじゃが息子に家督を譲ろうとかと

おもっている」

「それはまた突然」

「もう五十じゃ、人生70年でも年寄りじゃて」

「しかしご息は」

「連れてきたが何処に行ったやら」

いきなりドアが開かれて身なりを整えた見た目憂わしい美青年が居た、騎士団長に選ばれたヨギリが見とれるほどに。

「少し遅刻だよ」

「申し訳ありません総督殿」

「どういふことじゃ？」

「はい父上、暗殺から逃れるために一芝居打っていました」

「総督を試したのか？」

「戦の名手ですから野心家とっております」

「これなら家督が譲れる」

「まあ座りなさい」

「はい総督殿」

ホカロイ家の騎士団長が、慌てて椅子を離れ、テーブル近くに椅子を置く。

それに座り今後の方針を決めた雨が降って隊商が困る事がシバシバ、そこでレールを退きその上を隊商が通るそれを全地域に、と言ったものだから今度支払われる分を工夫し様として、別れた、ボカロイド家の元当主は嬉しそうに帰っていった、他の者も安堵の声が響いた。

それからボカロイド家はロウ伯家をお手本に独自に再整備計画に改良を加えた、それにレール代を出せる分をヘソクリから持ち出した。

翌月、三家が蜂蜜の都と呼ばれる総督直轄地で話し合い、何度も議論を重ね一定の距離ごとに駅を作る事になった。

レールは共同で開発にあたり施工も共同で当る事になった。

第三章、計簿は黒字でも維持費が大変なのに。(後書き)

一応設定は作ったのですが、未熟です、申し訳ない

第四章、展開

第四章、展開。

再整備計画も山場を過ぎ、レールの開発も成功し施工している、それにあわせレール式荷馬車を作っていた、現ボカロイ家当主、アロンソーは遊び人と称して噂されていたが、当主になってからはめきめき頭角を表した才覚溢れる青年と言えよう、未だ24歳の総督と同世代だが、戦の経験が無い事がネックだと言われる。

各地でロウ伯家を真似る動きが起き、もはやその影響力は桁違いといっても過言ではない。

王家すら迂闊に手出しできないほどに。

となると暗殺だが、現女王は良き貴族として褒め、平和を謳歌していた。

中高等学校を卒業した者が役人になり、もしくは学士になり、それぞれ総督の下で働いている。

ロウ伯直轄地で生産される漬け酒は高値で売れ、特産品として王国内外から挙って買出しに来るものが絶えない。

一樽、地方領主の平均年収の三割に達するほどの高級品。

軽く王家の資産を超えろと思いにきや、生産コストが高いために儲かっていそいで実際の利益は二割増し程度。

実際儲かっていると云われるが家令のアウロウが愚痴を零したくなるように利潤が少ない、しかもエルフが大量生産するので、年々コストが高い割には利潤が少なくなっている。

それでも直轄地の総予算は侯爵家を軽く超え公爵家に近い。

結果的に総督になってからは、再整備計画の大半の資金を担っている。

三家も真似始めた制度に、特産品作りに躍起になっている。

基本的に南国ながら亜熱帯でサトウキビに近い作物から砂糖が取れ、伝統的に砂糖が特産品でそれも今までの総督の不在で連携が取れず大量生産できないでいたか、今は総督がおり、連携して砂糖に躍起になっている。

農民も砂糖の方が稼ぎになるので利害は一致している。

月に一回の会議、それにより共同で商会を立ち上げ王都に店舗を構える事になったが、総督のグレイスが、これだけでは在庫が直ぐに切れ店じまいだ、として加工品を作る事になった。

「疲れた」

「珍しいですね、私も疲れました」

「俺なんか再整備計画の総監督だぞ、騎士の仕事じゃねえ」

「九万人を纏める苦労を考えて一番疲れるのは私でしょう」

「というか巫女殿、何故こちらに」

「非常に簡単です、遊びにきました」

「おいおい九万人の苦労はどうした」

「いまや子沢山でもっとです」

「全く、子供ですか」

「遊びたいのです、毎日毎日働いても給与はです、好きな買い物も出来ず」

「俺もだぞ」

「いえ実際は、花街に行くほど元気で、金も使っています」

「カー」

「お前本当にエルフか？」

「間違わないでくださいハイエルフです」

「エルフではないですか」

「要すればエルフだろ」

「早い話しエルフだろ」

「ハイエルフです、という訳で給与ください」

「月給ぐらい払っておくか、アウロウ」

「致し方有りませんね」

月給として高級役人並みの金額を渡した。

「じゃ行つてきます」

「おう」

声をかける前に走り去っていった、本来なら城が作られるはずが蜂蜜の都には豪邸しかない、そこで暮らしているので利便性と居住性の合理的な作りになっている。

後に買い物しまくったエルフを見かけた、という噂が広がった。

それから郵便制度、郵貯制度、年金制度、功績制度を創案し立法して制度化した。

当初、他の貴族から異議を問われたが、熱心に説明し理解してもらった。

戦争が終りもう五年、地方領主から総督に上がって一年、僅かな時間にこれだけ出世した者は例を見ない、また新制度を次々と出す貴族も例を見ない。

要すれば風雲児のような存在なのだ。

もう少し歳を取っていれば、宰相になったかもしれない程の事に王家は残念がったといっても過言ではない。

領地には貧乏貴族から貧乏貴族の長男以下の者が往来し、新設された総合アカデミーに入っている、将来がかかっているため、勤勉な学生ばかりで魔導士ギルドも一目置く学園に成長している。

その魔導士ギルドは今のところ少数で魔導士の育成、魔導の研究、魔導の応用などに分かれて活動中。

仕事が入段落つけば休み、年々過労を感じ始めたグレイスは、使用人を家令レベルに達するために勉強や趣味を学ばせている。

行政官の使用人は愛人と同じらしく、夜の楽しみに集めたらしいが、今は俗に言う福利厚生が整っているのですんな事は無い、使用人も辞めたければいくらでも申し出ていいが、今のところ誰も申し出ない。

アカデミーでは農学にメンデルの法則と同じ法則が発見されそれを公表したら、神官達が騒いだが、もはや宗教が幅を利かせる時代は終わったのは、大司祭の事が明るみに出て、次々と宗教家の悪徳が公表され、粛清の嵐が吹き荒れた。

それは宗教家が目障りになった側面もある。

酒作りに成功したボカロイ家の当主アルフレッドベーカル、差通称アルフ子爵、それを聞いて直接購入したいと申し出今までの恩も有りますからと言って低価格で提供してくれた。

それを漬け酒にして様々な種類を試し、他の家も特産品を作ろう

といまや必死だ。

砂糖から養蜂から得られる蜂蜜に代わり、さらに高級化して莫大な利益を上げた、その資金をボカロイ家の平民まで配り、ボカロイ家の領地では酒作りが盛んになった、また質の良い物に褒章を出すと言つて酒造作りに精を出させた。

次に特産品を作つたのは同時期に、新しい新型帆船ガレオン船に類似している帆船、意外にも盲点だった鉷山採掘技術の製法である。

港は共同統治のため、行政官が派遣され、ガレオン船から積荷を運んで南から北国の外国に売り込んだ、高値で売れ、それを元に陶磁器や工芸品、シルクなどを運びそれを売買して総督任命から二年で王国1豊かな州になった。

その裏には縁の下の力持ちの魔導士ギルドが居たからだ。常に風を送る装置を開発し、魔導士が魔素と呼ぶ元素を風に変える機関を作り、それで送風していた。

再整備計画も終りに近く、後は村村までレールを敷くのみで軽く三ヶ月で終つた。

豊かさから村が町に発展する事もあり町長選が行われた。仕事に炙れたものが流れ込み、港で特技から各ギルドに配置されていった。

商業ギルド、工業ギルド、農業ギルド、鉷山ギルド、魔導士ギルド、学士ギルドなどがある。もちろん船乗り水夫のギルドもある。

何故組合が必要かと言うと、簡単な話で個人では大した事無くても大人数なら権力を振るう側も多少は緩和するからだ。それと質を落とさないため、同業者で会合を開くため。

そんな事とは裏腹に王都に商会を立ち上げ、直接売買し始めたか

ら商業ギルドはそのまま吸収された。

大きく発展した総督以上は無く、よその地域に回すにはグレイスの領地を没収するしかない、

しかし功績者で戦争を止めて左遷されても、頭角を出した公爵家の分家を、おいそれと剥奪できない。

王家にも受けがいい、樽もさることながら左遷されても不満の一言も言わない事だ。

従来総督は権限で他家をこき使っていたが、グレイスは違う。

立場に物を言わす真似せず、他家を大切にして資金すらだし州の繁栄に尽力した。

それは傘下の他家も同じで、共同で州を盛り上げたと言われるほどだ。

故に縁談の話は多いが、財産目当ての嫁はいらないと家令が断っている。

代わりに助言したが。

奴隷解放から、奴隷商は奴隷から解放されたが、今度は小作人に固定され農場主に酷使される日々。

乾燥した果実を商品にして平民に配った家令は、成功したに近い報告を受け、王との支店に販売した、それから乾燥した果実を作り方が普及し、様々な地方で使われた。

第四章、展開（後書き）

感想、評価などを作者の駄文が改善するかもしれません

第五章開戦と未来

第五章、開戦と未来

噂は電撃的に広がった戦争を仕掛けた国が報復に侵攻すると、そこで各領主、各総督は軍備の増強に走った。

幸い屯田兵制度に加え自警団が全域に及んでいるために、敵軍は陸路から来ると踏まれたが、王都に直接乗り込むと公爵家が騒いだために、兵員を裂いた。

それが不幸中の幸いを生んだ宣戦布告した敵国は王都に海上から上陸し進軍したために防備を固めていた王都は守られたが、多くの兵が死んだ。

敵軍は海上から上陸し、補給も輸送船、海軍を持たない国家にとって厳しい時代になった。

一方辺境である南国も港町に、上陸しようとした敵軍と交戦中だった。

屯田兵から兵役につかせ騎士団と同じように馬に乗せて、上陸してくる敵軍を確固撃破をしていたグレンゾン騎士団長、捕虜などお構いなしに敵を求めて港町に進軍中だった。

遡る事二日前、貿易船が帰ってきて大船団を見たと報告し、行政官は直ぐ様総督に報告した、それから各地に報告が生き、エルフ兵团、共同騎士団、総督騎士団、各地方領主騎士団が集まっても二万に届くのみ。

港町に上陸すると思われいつでも戦える準備をして屯田兵も兵役

に付かせた。

荷馬車レールのおかげで雨の中馬を大量に運べ、騎士団は騎乗し兵士はバイクを装備させた、エルフ兵団五千はコンボジットボウで弓兵団を組織して、急ぎ防衛拠点に配置した。

一日後、狼煙が港町から昇り、それから上陸してくる敵軍の兵団を兵士の戦列と、騎士団の騎馬戦術、弓兵の鋼すら貫通する弓の嵐をばら撒いた。

少数の兵で勝てたのは敵軍が分散していたからだ、作戦がもしばれていなければたら奇襲で籠城戦だっただろうが、貿易船の船長以下水夫に褒章を与えてもおかしくない。

港町に上陸した兵は限られているが、次々と上陸する兵に押されていく一方だ。

「厳しい」

「勝つことは出来るけど厳しいね」

「団長」

「分かっているさ、連中はこの土地が欲しいわけだよ」

「巫女殿戦は初めてでしたか」

「俗に言うお礼参りです」

「それ言うなら恩返しでは」

「両方です」

伊達に騎士団を結成したわけではない、騎兵として使えるため馬上訓練を欠かさない。

今までの鬱憤晴らしといえば敵兵が哀れだが、戦争を仕掛けてきたのは敵軍のために、同情はされない。

そして今に至る。

圧倒的な兵力差を戦列と弓兵で補い、回り道した騎士団が横腹をつく、大都市の港町で繰り広げられた防衛線は劣勢から押し返し始めた。

それは騎兵と弓兵の使い方用の用兵術だ。

そして長い航海で疲れきった敵兵の体力にも大きな要素が合った。

丸一週間戦いつづけ、港を諦めたのか引き返し、一応現段階では防衛に成功した。

ロウ州の軍は満身創痍である、これ以上戦うなら敵軍に倒されるだろう。

そこで旧式のガレー船を使い水夫をかき集め作戦を説明した。

それは後にロウの奇跡と呼ばれる海戦だった。

ガレー船で接近しラムで穴を開け、船主角に油を染み込ませた布に火を付けぶつけて外しては逃げ出す、それが数十隻が行い、全船を延焼させた、生き延びた敵兵や将は捕虜にして防衛線に成功した。

そこで海軍建設がはじまった、同時に戦功者の報酬に勲章、貿易船の褒章、勇敢な水夫達の褒章、多大な出費も四家が合同で称え与えた。

誰もが驚いたのが褒章を与えた自家の者以外の名前も出身地も知っており、功績を称え高価な貿易品の蜂蜜酒を送った。

それはエルフも同じく、それにどれほどの度量が有るかが分かった。

それでも立場に縛られず軽口を叩き、水夫すら海軍に入るほど人気の高い総督になった。

そんな時期に困ったのは収穫期だということだ、屯田兵を帰し騎士団も総出で秋の収穫を手伝ったが間に合わない、そこでエルフの巫女に頼んでみ、エルフ九万人中五万が協力を申し出た、おかげで秋の収穫に間に合い農産物がエルフにお礼として送られた。逆に今まで感謝を込めてと蜜酒を送られた。

エルフと人間が和解した事になる、その事からエルフを奴隷にするのは違法であると明文化され、多くのエルフが移り住み始めた。

暫くの空白でつかの間の休息で敵国はまた戦争を挑んだ。

今度は総大将をグレイスにして、総力戦を挑んだ、相手は決戦主義で戦列を組んで草原の会戦を挑んだ、そこに落ち度があった。

相手も学習して両翼に戦列を組んだ の様な陣形だ。

総督の地方騎士団は馬術に長けている、そこで戦列指揮をアウロウに任せ、騎士団と共に背後に回りこんだ、巧みにコの陣を完成させ背後からの奇襲で敵軍は総崩れ、しかし、今度はコの陣が前進し、戦列を維持しなければ全滅になるしかない。

敵軍も分かっており必死に中央突破を狙うが、今度は弓矢が落ちてきて敵軍は崩壊した。

逃げ場の無い戦場で降伏する兵士達、騎士団、国王だけは奮戦したが、捕虜になった。

その捕虜交換で莫大な賠償金を支払いさせ、二度と戦争をしない事を誓わせ、戦争は終わった。

敵軍の死傷者は半数に上り、重鎮も戦死して、次第に臣下の道をたどった。

グリエツダ王国の歴史で名将と記載される後の歴史家はこれほど優れた人物なら総大将にでもすれば良かったと言う程だ。

しかし、別の視点から見れば戦争の方法を変えた会戦でもあった、騎兵という一部の存在により大軍で勝てる時代ではなくなった戦史家は後に現れる騎兵戦術の始祖と評価したハンニバル・バルカと似たが

それが若くして行方不明になった。

一体何故と言うほど誰かが誘拐した説が有力になったが、どこにもグレイスの痕跡は無かった。

「ここは」

「お気づきになれましたか、やっとの目覚めですな、かれこれ数百年も眠っておりますした神殿の魔素が凝縮したクリスタルの中で」

「ということは未来」

「貴方からすればそうでしょうが我々からすれば現代ですな」

「グレイス・ロウが名前だ」

「おやおや、これは珍しい古代の名将ですか、今や魔人ですな」

「魔人？」

「知りませんか、古代において魔素が発見されてから、魔素を吸収しすぎた人間の亜種ですな」

「エルフの様なものか」

「エルフに近いですが、性質が異なります貴方は自我をお持ちですが、殆どの魔人が自我を持たない破壊の化身です」

「そうか、失礼した国に帰りたいが」

「もう亡国です、今ではエルフが済む土地です」

「何れ礼をしたいが今は国に帰らせてくれ」

「別に構いません、我々は有翼人、鳥から進化したと伝えられておりますな」

「進化か、僅か数百年でそこまで代わるか」

「元々は隠れて暮らしておりましたから」

医者に感謝して何れ礼はすると言って貴重な魔導具を使い故郷に帰った。

総督だった頃の面影は無く、エルフの森に入った、直ぐに捕まったが不老の彼らからすれば忘れられない名将でもあり大恩人でもありエルフに甘かった総督でも有った。

何よりもかつての巫女がいまだに存命で、再会するなり涙を流し今までの事を話した。

今ではダークエルフ、ウッドエルフ、スノーエルフ、ハイエルフがそれぞれ別々に暮らしており、この南部の地方は黄金の州とかつて呼ばれた面影は無く、エルフの中でハイエルフのみが唯一伝統を守り総督の帰還を待っていた。

長い話が終り、通称の巫女、今や最古の魔導士の一人、かつて創設した魔導士ギルドが王国を滅ぼし魔導王国を建設して僅か二百年

で王家の血は絶え滅亡した。

今や手のつけられない無法地帯、誰もが寄らない土地になっている。

気になっていた行方不明になった後、総督になったボカロイ家の当主は善政を尽くしたが、また戦好きの国王が誕生し隠居したそう
で、他の家も同じく。

魔導国家もエルフには手出しせず、その為に精霊使いから魔導を習えた、エルフが不老のために技術を蓄積する生き字引に使えたからだ。

その技術を若者に伝え、多くのハイエルフが精霊界と繋がる道を使い他の地域に渡っていった、その為に人間は激減したがエルフは大きく飛躍して、ハイエルフを除く国家を建設した。
魔導を習い、約二十年で習得した、持ち前の知性が理解を早めた。

魔素から作り出された魔物も群雄割拠しており、かつて臣下の道を辿った王国は独立し、国境を封鎖して魔物の侵入を防いでいる。

「俺の人生も無駄だったとも言っのか」

「いえ結果としてこの地方は不可侵よ」

「そうか、かつての部下達はもう居ないか、寂しいものだ」

「私が居るじゃない昔みたいに作りましようよ、今度はエルフの王国、もちろん全種族平等よ、人間みたいにやたらと貴族の権利が強くないようにね」

「貴族を無くせばいい」

「その案に賛成、でどうするの」

「手伝ってやるよ」

「それは心強いわ」

「だが王にはならないぜ」

「安心しなさい、別に無理事はしないから、ほんと昔話が出る人間がいて良かったわ」

「いや魔人だって」

「要すれば人の国家よ」

三種のエルフに噂が広がり、かつての部下達が挨拶に来た、懐かしそうに苦労話を聞いて相槌を打ち、何千と居るかつての部下達は今では重鎮らしく、中には元帥もいた。

そんな訳であっさりと冷戦をしていた三種族は、ハイエルフの元帥の地位についたエルフ王国の元帥の下に収まった。

第六章大移動（前書き）

少し書き直しました

第六章大移動

第六章王国統一

兵力・四千、弓兵一千、魔導兵二千、魔導戦士一千

産業、農業、林業、鉱山、手工業、酒造、養蜂、産業は充実している。

装備、鉄の武器、皮製の鎧など、魔導具。

人口二十万、各所に点在していたが旧蜂蜜の都に集まった。

現在の目標ロウ地方の統治下に置くべく浸透を図る。

エルフ以外は入れないために目標達成は容易い。

土官、ダークエルフの国王だった古参兵、ウッドエルフの国王だった古参兵、スノーエルフの女王だった古参兵、三人共グレイスの歴史的な会戦を経験した指揮官。

書記長巫女護衛官ミコトより抜粋。

一月、南国の雨に打たれながら浸透を図る作戦はあっさりと成功したが、今度は次の問題が浮上。

第一、誰が第一次産業の土地を手にするか。

第二、誰が行政官になるか。

第三、誰が村長になるか

第四、誰が町長をやるか

第五、エルフの出産率の低さ、消耗戦になれば敗戦する。

二月、エルフ連邦王国の元帥権限により土地の分配は終わった、代わりに屯田兵制度が導入され土地を得た者の義務になった。行政官も元帥の吟味で選ばれ、村長は村人から、町長も町人から。エルフの出産率の低さは質で補う。現在結婚が流行の様に違う種族でも結婚し、これからは混血児が大半を占めるといわれる。元帥の影響恐るべし。

三月、色々と落ち着いてきて、田畑や養蜂などが行われるが、元帥により砂糖の生産も始まった。

四月、再整備計画が浮上し、貧しい国庫では無理だと言ったら元帥が軍隊だけでもやると言ってやり始めると手伝い始める者が現れ始めた。

五月、元帥の人気は高いその背景にあるのは厚みのある人を和ませる雰囲気、エルフの女性が挑戦したが、魔人の子供は迫害されるとして潔く断った。

六月、エルフ王国の弱点が露呈、掘削技術を持たない、そこで旧魔導王国のゴーレムを復活させ掘削に使う、魔導士の三人交代でゴーレムが鉱物資源を掘削中、後は人の手だ。

七月、木製のゴーレムでは力不足だとしてアイアンゴーレムに切り替える、後に兵力としても使えるように改良、元帥と言うより宰相に近い。

八月、アイアンゴーレムの掘削は掘削後の製鉄などが追いつかないほど早い、その為民間人を雇ってみた。

九月、収穫祭、実りの秋に蜂蜜酒が配られ、労われる。

元帥は唯一の人間出身だが、魔人であることを感じさせない温かな心の持ち主、兵を労い九月中は休暇を与える

十月、屯田兵とは別に志願兵が多数現れた、それを受け入れる国庫が豊かなために志願兵として入隊させた、アイアンゴーレム恐るべし

十一月、南国なので他の地域より暖かく、二期作になると思われる。

十二月、来月は建国記念日がある、エルフにも貨幣で支払われ、貨幣で税が徴収されるが、屯田兵は兵役に付くために免除代わりに訓練が過酷になる。

書記長ミコトのエルフ王国史より抜粋。

「建国記念日、一日だけの休暇よ、みんな飲んで騒いで食べ物を食べて」

短めの演説、続いて元帥より訓示の言葉を並べる

「今宵限りは騒いで飲んで、鬱憤晴らした」

訓示は無かった言葉に書記長が睨む、それを苦笑で帰し、元帥も騒いで飲んで食べた、それも見事にいつもなら見られない様子に、苦笑するしかない王国士官達。

誰もが頷く一番楽しんだのは元帥だと。

本格的な戦の無いままゴーレムを使って掘削して、鉱物資源の他種多様な物を王国の国庫納め、余った分を労働者達の隠し財産にしたのは元帥の案だ。

「いいですかね」

「いいんだよ、君達のおかげで、国庫が持っているといっても、過言ではない」

「しかし、わからないものですね、父が使っていた人にめぐり合うとは」

「ほう、父の名前は」

「グレムゾンですが」

その答えに元帥であるグレイスは珍しく表情を凍らせ、じつとエルフの青年を見る、確かに髭面の団長の面影は内容に見えるが両目の特徴的な吊り目が良く父親に似ている。

「ここをまとめているのか」

「昔からの特技なんでやんすが、何故か纏め役になるんすよ」

「なら鉱物大臣にならないか」

「大臣ですか」

「ちゃんと知っている、暗黙の了解を理解している者を探していた」

「分かりやした」

取り得の無い者にとって唯一の働き場所だ、それを理解した上で小粒程度の物を貰う、肉体労働で大変なので、生活が苦しくならないうようにする唯一の方法だ。

グレムゾンの息子が鉱物大臣になったとして報じられ、かつての会戦を知る者は賛辞の手紙を送った。

元帥の地位に居ながら宰相不在のために合わせてやっている為、非常に多忙であるが抜け目が無く暇を見つけては昼寝していた。そんな時、サボリ魔から生真面目一辺倒に変貌した巫女だった女王も、馴染んだように同じく昼寝していた。

「また昼寝ですか」

女王の補佐官、かつてのアウロウに似た性格でサボる事を怒らず、説得して仕事に戻らせるのが彼のやり方だ、名前はロウグレ

「元帥ともあるう者が怠けるとは嘆かわしい」

「大丈夫仕事は夜までに終らせるから」

「姫様、また昼寝ですか」

「眠たいの春の木漏れ日ってやつ」

「そうですねか臣民が熱心に働いていると気に昼寝ですか？心を痛めるなら仕事に戻ってください」

「貴方も苦労したわ、昼寝しなさい」

「するわけ無いじゃないですか、大事な謁見が溜まっております」

「んじゃあ俺が代わりにやってみよう」

「ありがとね」

「元帥殿、姫を甘やかさないでください」

「巫女さんも大変なのさ、それぐらい分かるだろう」

「それは分かりますが、それを」

「じゃ俺がやるわ」

「ではこちらに」

謁見とは面倒なものかと思えば、単に話しを聞いて解決策や仲裁する事、時には説得する事もあって元々攻撃的な者を和ませる雰囲気からあっさり片付いて、執務室で書類仕事をして夜豪邸から宮になっっている自室で寝る、大抵グレイスの酒飲み友達巫女さんと呼

ぶ女王が遊びに来て昔話をツマミに蜂蜜酒を飲む。
だが珍しくこず、一人飲んで寝た。

翌日、士官以下幹部を呼んで会議を開く。

「よいか？」

全員が頷く、いよいよ戦争だと覚悟した顔になる。

「大陸南東部の半島にある南国がここ」

棒で地図上の南国の場所を刺した、一番小さく後は北に向かって移動するのみ。

「そこで各地の拠点、つまり手近な村々、町々を統一する、王都は最後だ」

「質問です」

弓兵隊のナルシュが拳手した、元ダークエルフ国王の黒髪、黒容積の瞳、褐色の肌、男性ながら優男の風貌ながら100メートル先のウサギを仕留める腕前、彼に一同が見る。

「魔物共はどうします」

「人型なら捕まえて教育を施す、使い道のある魔物なら飼育する、百害有って一利なしは倒すしかない、今までの鉱物からアイアンゴレムを量産する」

「それなら三ヶ月で可能です」

「そうか、なら三ヶ月でどれ程に量産できる」

「三百体です」

「少ないが、もっと量産できるようにしてくれ使い道は山ほどあ

る」

「承りました」

魔導大臣のギユスターが鷹揚に頷く。ハイエルフの銀髪、緑陽の瞳、元々は魔導の研究にぼつとしていたハイエルフの変り種

「半年後進軍する、それ故騎馬に乗らず徒歩で歩けるようにしてくれ」

三人の元国王の士官が頷く、理由は馬まで水と食料を与える事が出来ないからだ。

「補給は大丈夫か」

「安心してください、十二分に二万人を二期作で一年食わせられます」

「二万人を食わせられるようにしてくれ」

「承りました」

農業大臣のホギューが一礼した。元々は薬草を研究する長い月日でメンデルの法則のと同じナーベラーの法則を発見した事から、交配を重ね長年で直せない毒は無いと言われるほど、薬草学を発展させた偉大なの異名を持つ賢者のハイエルフ。

平平凡凡の容姿の魔人グレイスが実際異彩を放つが、見た目が良いエルフの中でまさに平凡な容姿で元帥とは思えないが、元帥なのだから誰も名文句一つ無しに天才肌の智将であることは誰でも知っている。

六月まで軍隊は徒歩に慣れるので、重い荷物を持って体力作り。

各地に散らばる魔物から人型を狙ってさらい、元帥と女王が言葉

を習った、どうしようもないオーガのみ牢獄、残りは共存可能と判明した。

エルフ語を公用語にしながらも異種族の言語を理解していった。

エルフ一人とさらった人型の、竜人、猿人、オーガ、コボルト、ゴブリン、オーク、フロスト、ケットシー、イエティ、アイスマン、ドワーフ、有翼人、コーンス、カエルの多種多様。

コボルト、ゴブリン、フロスト、ケットシー、ドワーフ、有翼人、コーンス、カエルは直ぐに大移動して南国のエルフ結界線の前に集まっているのは見事に一人？以上居る。

進軍して領土を確保して種族ごとに分け、住ませ族長と行政官がお互いに補佐する役割の行政、司法、立法のシステムが作られた。一応エルフ語が公用語の為に夜間学校で学び、昼間は屯田兵として農業、漁業、塩田作りに精を出した。

軍隊が駐留し族長を通して、半年間で豊かな大農業地に早変わりして、蜂蜜の都から南国から八地方の中央のナルディアに都を移した、その際レールを引き、レールの馬車、貨物馬車、隊商が行き来して、灌漑も魔導王国がかってやられていた計画を引き継ぎ、行って山脈から淡水を引き、各州に届け、海と繋げ、内陸部まで船が往來するようになった。

建国記念日に各族長を呼んで村々には肉類と麦酒を送り、町々には南国で取れる果実を乾燥させたドライフルーツと果実酒を送った。首都では新たに作られた質素な宮で宴会をしていた、建国記念二
年目。

族長達も呼ばれ狼の一族と称すコボルトの族長アラン、
鬼神の末裔と名乗るゴブリンの族長バルバッタ、
氷河の民と称すフロスト族の族長ラダン、

虎の一族と称すケットシー族長エルフェルト、
土の妖精と名乗るドワーフ族の族長ギムリ、
鳥から進化したと名乗る有翼人の族長リース、
月の妖精と名乗るコーンスの一族の族長ナルディア、
カエル族の族長ライタ、今のところはエルフが7割を占め、残る
種族が3割を占める。

グレイスは元帥として族長達と話し合い軍隊に組み込めるかとそれぞれ
の得意分野から役割が振られるが、今のところ訓練中とする
しかない。
残り政治話になり、知恵を出し合って課題を克服したが、特に問
題も無い種族もいたカエル族だ戦闘能力が低く、水夫として訓練し
た方がいい。

第七章統治下

第七章、

エルフが団結し、七種族を統治下に置いた噂は電撃的に広がり、隣国は静観に留まった。

各地で迫害されていた種族は、亡国領土に入りエルフの統治下に収まった。

人口は五十万まで膨れ上がり、エルフが四割、異種族が六割に人口が逆転した。

軍に志願する者も絶えず、戦争が算数なら勝てる数字だ。

食糧事情が悪化してさらに土地を求めて進軍し、各地に廃村、廃町、廃都市を治め。

その土地に住ませ、エルフの魔導士が作物等を成長促進させ、おかげで餓死者を出さずに済んだ。

戦力、エルフ弓兵隊、エルフ魔導兵隊、魔導戦士隊、残りは訓練中、一万に昇る予定。

産業、各種族の特産品、第一次産業が主流、第二次産業が二番目に多い、第三次産業も拡充中がまだまだ未整備の為に物流が首都に集まって運ばれる。

装備、鉄製の武器、皮製の魔導士の加護が与えられた防具、

今後の目標、再整備計画の為に、余剰労働者を雇う、各族長達に州の総督を任せ、各地に行政官を派遣、課題、エルフ語は古代語の公用語、異種族は訛りの強い魔導王国語。
近年変異生物が暴れまわっており、軍隊が討伐を繰り返している。

現在は五年を計画的に統治下の十六州を再整備して教養、技術の相互関係を築く。

建国記念日から三度目の記念日の前に、年越しケーキが配られる。

一月、建国記念日を祝い盛大なお祭り、族長や元帥、女王が演説をして一年の訓辞を述べるが、例年どおり砕けた感じ訓示で終わった。

二月、エルフ結界内で混血児達が大騒動、子供達の教鞭をとる教師が残念がるほどに広まった陣取り合戦。

三月、アイアンゴーレムと鉄製の農具、漁具を作る、かつての貿易港を復活させようとエルフの技術者がガレオン船を復元中

四月、二期作の南国と違い首都は四季折々の豊かな花々や木々が見事に豊かな上流階級が旅行来るほど。

五月人口増加傾向でますます農学が発展する、それに尽力した有翼人の族長の事を記載したい。

六月、国境になる大河川の場所に要塞を建築、その技術力はドワーフのもので、地下通路すらあるために、その設計思想は後世にも受け継がれる事だろうと思われる。

七月、要塞としての機能が始まり、国境に総数十個の要塞が建設される予定。

八月、元帥の命で海軍創設を検討、カエル族が水夫に抜擢されるほど優れた海戦能力の持ち主と判明、しかしカエル族が少ないために精鋭の旗艦に乗せる事が決まった。

九月、再整備計画が各種族の懸命な働きぶりから一ヶ月も短縮された。収穫祭で各地に新酒を贈呈

十月、各種族の適材地に移り住む計画が浮上、大移民計画と名づけ、族長達と話し合い一部ずつ移していく事が決まった。

十一月、農業地を広げながら移住計画を行う。

十二月、年越しケーキが配られる。好評な南国の乾燥果実がケーキに混ぜられた。

書記長ミコトの記録より、及び詳細は書籍の中に。

「四年目かなんか戦争より、飢餓との戦いだっただよな二年間だったな」

「実際税収上がったし、右肩上がりの予算だし、国債も買ってくれるし、グレイスが考えた制度が今でも好評だし、軍隊の仕事はモンスター討伐よ」

「国境も守っているのだが」

「分かっているって、だけど宰相を見つけないと現場にいけないわよ」

「だから五年計画といたただろう」

「宰相が優秀ならいいわ」

「リーナにしてみれば」

「それはいい案ね、飲み友達だし」

「気が合いそうだ、共に女王の苦勞がわかるからな」

「そうそう、女の子で共感って少ないのよ？」

「基本的に部下と族長達の信頼と信用は得ているから、堂々と愚痴れるのだ」

「なんか負けた気分」

「こればかりは資質と言っしかない、それに巫女だって信頼は得てるだろ」

「たけど愚痴話できないし」

「リーナと遊んでおけ」

「そういえばペガサス騎士団を建設するって聞いたけど」

「耳が早いな、捕獲したペガサスを騎乗させるために、軽めの「ポルトとか、ゴブリンとかを試している」

「気楽な旅でもしたいわ」

「何だよ話しをすり替えて」

「だってワンコに子鬼ちゃんは可愛いわ」

「部下に言うなよ？完全に士気が落ちるから」

「伊達に長生きはしていないわ」

「その内お局様って呼ばれるのか」

「しかたないでしょう、グレイスが居なくなっただけからは、エルフは大変だったのよ？」

「まあ三竦みをするほどな」

通称巫女がグレイスの足を踏む、非力なエルフの為に魔人の魔素が無意識に防御に回ったらしく痛みを感じない、それが悔しいのか今度は肘打ち効果が無い為、裏拳をかましたが平然と受けられ非力な腕力では効果が無い。

女王の演説は入り。

「皆さん、我々の王国に腹いっぱい、飲めるだけの酒、美味しい料理に舌鼓を打ちましょう、そんな将来がきる事を期待して、今年度もよろしくお願いしますわ」

演説台から降りると暖かな笑いが広がった、族長達は静観していたが、自分の演説に自信は無さそうだ。

それを察したのがグレイスが助言し、堅苦しい印象は与えないようにと、要すればいつもどおりで十分だと。

グレイス自身演説で笑いを起こし、端的に言えば仕事が減れば良いなを冗談を混ぜて遠回りに話したからだ。

族長達も緊張が解け、気楽に演説していった。

このようなノリの為に支配と言うより、互いに助け合い共存しながら、エルフの女王の統治下に居るといふ認識でしかない、それ故反乱も犯罪も起きない、エルフ全体を見ても支配者というノリではない、ましてや貴族制だと叫ぶような馬鹿も居ない。

元をたどればグレイスが助けた事から始まり、エルフ全体を通してグレイスは名将で恩義のある人物なのだ、例え今は魔人でも。

建国記念日が始まると、新都の宮の侍従の長である侍従長は大変である、あれやこれやと指示を出して今ではエルフが作る蜂蜜酒は何度も改良された物が出され、生産量から一日で生産量の三分の一を消費する。

そんな侍従長の飲み友達に書記長のミコト、どちらも女王になつてから生真面目に成長していた二人からすれば若者が、また昼寝したりする悪友と呼んでも良い元帥、当然恩義は有るが、女王と一緒に昼寝する姿を多くの者が見入るために、仕事振りが優秀な二人だから可能な事と言つても過言ではないが、侍従に説明するのも大変なのだ。

書記長も大変なのだ王国の情報を集め記録として残し、王国の出来事なるべく丁寧に書き記す、後に誰かに代わっても読み解けるようにと、しかし、エルフと異種族が共存し今やその比率は4:6エルフの屯田兵が公務員として様々公職について稲のは致し方ないことで、何せ異種族は教養が無い上に、亡国の魔導王国語の訛りが強い言葉で話すから困ったものだ。それ故縁の下の力持ちの二人は愚痴を零しあう飲み友達になっていた。

第八章 旅路

八種族が傘下に入り、早二年、建国から4年

元帥の仕事を軍師に押し付け、旅に出たレイグス、後に放浪癖があると言われるハメになるが、彼は気にも止めなかった。

それを知った女王は宰相に仕事を押し付けて同じく旅に出た、後に元帥の悪癖が移ったと言われるのは、グレイスが悪癖を数多くもつからだ。

昼寝にばかり、放浪にばかり、仕事を押し付ける事にばかり、軍事予算を酒に変えて軍役に付く者に配った事にばかり、色々功績があるために文句が言えないが、その為に士官や兵卒には大変人望が厚いが、予算関係の立場ある人々には一部を除いて大変遺憾である。

旅を続け気楽な一人旅だが、旅費は旅で金になる薬草や、モンスタ―討伐を通し村人では高い宿屋に泊まれる。

「元帥さん」

「何だいアラン坊」

「これいでも二十歳です」

「知っているよ」

「虐めて楽しいですか？」

「これでね数百年生きた魔人だ、若者を弄るぐらいどれかの神様が許すさ」

「要すれば楽しいわけですね」

「そうそうツンケンすんなよ、アラン族長」

「族長の中で最年少じゃないのですよ？」

「若いな」

アランが歎息し、いきなり単身で現れ、今までの礼とこれからの感謝を込めると言って族長が治めるアベン州の総督の都アトベンチヤー、廃都から二年で再整備消計画の一端で再整備されている。

「やっぱり虐める気だ」

「被害者意識が強いぞ後三年もすれば戦争だぜ」

「もちろんです、それにエルフには助けてもらっていますから」

「しかし、都は全種族が居るな」

「ええ、コボルトの織物を買取りに来る商人です」

「ドワーフが毛嫌いしていたが、器用だな」

「ドワーフは織物より、細工物が得意なので、商売敵のようなものですから」

「同属嫌悪か、似たような者を嫌うだ」

「おそらくそうでしょう、あまり気になりませんが、ドワーフの商人も着ていますし」

「特に問題なしか」

「エルフの皆さん優秀ですし文武両道を絵に書いた種族ですね」

「あれれ、魔人は」

「元帥さんは特別ですよ、魔人なんて魔神に仕える暴力の源です」

「魔神？噂に聞く王都に陣取る魔人の王か？」

「ええ、それはもう酷い事をしまくっています」

「さすがに魔神とて数と質には勝てまい」

「そう期待していますよ、元帥さん」

「じゃそろそろ移るわ」

「良い旅を」

次に向かったのはゴブリンの族長の総督が治めるメガネ州都、ゴブリンは生真面目で働き者の所はコボルトと同じ、力強い鬼神の末

裔の一族は農業が得意で畑を耕し、土いじりに向いており、戦士としても勇敢でゴブリン、コブゴブリン、ハイゴブリン、ゴブリンシヤーマン、ゴブリンキングが本来治めるがゴブリンーの知恵者をと呼ばれる最下級のゴブリンが族長だ。

族長の名前はバルバッタ、若くして地位についたと言っても三代で人生五十年と歌われる短命な種族の為に夜間学校では勤勉。

「おいおい元帥が旅して言いのかよ」

「良いんだよ、バルはまるで悪戯小僧だな」

「魔人が無駄にでかいだけだ」

実際エルフ並みに長身で、長年の鍛えがもたらした筋骨隆々の、剣術も達人レベルを超える超一流、魔導も超一流。

対してバルバッタは痩身で小柄、勉強に熱心と聞く噂されるが、いち早くエルフ語を日常会話まで学んだ、真の意味で知恵者だ。

「後三年か」

「思うんだが州軍を作らないか、予備役って奴だ」

「ふむ、それは首都に戻ったら実施しよう」

「後よ科学つてものを学びたい」

「さすがに有翼人のリースに頼まないと無理だな」

「宰相さんか、聞けば女王が旅に出て大変らしいぜ」

「全くけしからん」

「いやいや元帥さんが話す事か」

「軍師が居るから安心して旅が出来る」

「そうかい、軍師さんの愚痴がこぼれるぜ」

「また悪戯小僧だな」

「元帥さんもそろそろ行った方がいい、腕自慢が集まりますぜ」

「これなら心配は要らないようだ、大した政治家だよ」

「鬼神の末裔にも知恵がありやすから」
「あんまり無茶するなよ」

釘を刺されたバルバツタは苦笑し、隠していた書類を破いた。

その後コボルトの下を訪れた巫女こと女王アリアベルタは困惑し、長閑な農作業地に、訓練している屯田兵のコボルトの横で、軍楽隊が演奏している風景に、困惑の一言。

「あ！陛下」

エルフの屯田兵から軍役を課せられ、この地で屯田兵の教官になっているエルフの青年が叫んだ。

そうするとコボルトの子供達が来て「女王様だあ」と群がった可愛い小動物を見るように視線を合わせ、一人一人の頭を撫でていった。

「女王様一緒に遊ぼう？」

「ええ、いいわよ」

「わーい！」

そんな微笑ましい光景が、日が落ちるまで続いた。

結局エルフの公務員に労いも兼ねて挨拶して回ったのは翌日だった。

その日に宿屋に泊めていた馬に乗り族長の元に向かった。

コボルトの族長アランを散々子ども扱いし、鬻ぎを買ったが、それに反する子供達や学生達の遊び相手になり、時には教師の様になり、その結果鬻ぎは収まり、アランを子ども扱いするのは政治になれていないからと若いなと思う言動の数々、コボルトには珍しく血気盛んな印象が強い。

第八章 旅路（後書き）

旅路の果てになるが有るでしょう

第九章旅の途中

第九章旅の途中

フロスト族の族長の居る州都についたのは2、3日前、族長はラダンというフロストキング、140センチが最長の他とは違いニメートルの巨漢であるが、種が違うと入ったものでキングになるものは珍しい赤ん坊から成人するまでにわかると思う。

グレイスは先入観から最初コボルト族をワンワンと話す、コブリン族をコブコブと話す、フロスト族はというと挨拶がヒーホー、郷土料理か氷菓子を食べるが、ある意味共食いと言いたくなるのを必死にこらえた。

フロスト族は内陸部で氷を作って販売する特技を生かした生活をして、魔導士としての才能もありエルフから学ぶ事を学んでいるが、挨拶にヒーホー、さよならにヒーホー、とにかくヒーホーの語尾付く。

族長ラダンは寡黙な方で、氷自在に操る、その為フロスト族は一部が移民してから州から離れ、あちらこちらの州都で冷凍品を作る事で国に新たな製造法を与えた。

「相変わらず寡黙だなキング」

「魔物と呼ばれ、迫害されていた我々フロストを民にしてくれ、さらに土地まで与え、地位に付かせた事にまず感謝を」

「ヒーホーって言わないんだな」

「魔人殿、いずれ我々フロストの民は大きく貢献するだろう」

「いや十分か活躍しているが」

「それ以上だ」

「素の魔導士だからな」

「その通りフロスト族はエルフと同じく不老、出産率の低さ、しかし我らは勇敢である」

「そうなのか？一概に信じられないがキングが言うならそうであるろう」

「後三年で取れ程強くなれるかが課題だ」

「なあキング、氷料理は良いんだが、正直肉類とか無いか」

「無い」

「そこだけ短いな、魔人じゃなきゃ食わないぜ」

「ならよかるう」

「せめて酒は無いか」

「寝る前に付き合え」

「お前意外に自己中心的だな」

実際氷料理を食べた後客人用に風呂に入り胃の冷たさと、風呂の温かみで気分は最悪だったが、フロストキングが寝る前に付き合えといった酒は、最高級の蜜酒で程ほどに冷えており、これが大変美味しそうに飲んでいた。

一方ゴブリンの州都に付いたアリアベルタは困惑していた、今まで見た農業地から見える長閑な風景から州都は喧騒に満ち溢れた大都市だった、ゴブリンは質素な洋服を好み、お洒落なコボルト族とは違う、代わりに男女共に香水をかける風習がある。香水が特産品

バルバッタは大歓迎したがありの歓迎振りに「元帥の時はどうしたの」と聞くと。

「元帥の旦那は地味です」実際普通に歓迎した、そこには親しみやすさがある。

裏を返せば面倒な政治話かと思えば、ゴブリンの話に終始し、大変な肉料理の数々にエルフの野菜派の彼女にはヘビーだった。

客観的に見れば、彼と彼女の旅は成功と言える、親睦を深めると同時に、個々の種族の特徴を把握する事が出来たからだ。

ケットシーの族長の下に向かうと暢気な外見とは異なり寡黙でお洒落を好み、楽器を作っては商会に納めている、今まで見た種族より経済を理解している。

族長のハルフェルトは多忙な執務を抜いて会食を共にした。

「ケットシー族の特徴は理解できたかな」

「おいおい坊主、格好つけても長靴を履いたネコだぜ」

「ネコではない虎だ」

「そうだった、しかし商会ね」

「それが何か？」

「いやいや面白い発想だと思ってな」

「他の種族にも伝えるのか」

「もう少し高度なものかな」

「いずれ聞こう」

「会食を共にしてくれてありがとな」

「いきなり何を言うかと思えば、そんな事が元帥ともあるう者がふらりと訪問する事態が異常なのだ」

「長く喋れたな」

「執務は大丈夫なのか？」

「軍師に押し付けた、どのみち連邦王国は各種族の上に成り立つ他種族国家だ、それ故に公平で合理性が求められる、あの抜け目の無い軍師なら分かるはずだ」

「それ程信頼するとは」

「昔馴染みの部下だ、何百年前かは忘れたが」

「さすがはエルフと同じく不老の魔人殿か、しかし魔人とは思えないな」

「そこだよ他の魔人の事を教えてくれないか」

「うむ」

ハルフエルトが語りだす、人の形に酷似した猫の語り、虎と言っても猫科には変らない。

語られた話は要すれば魔人達が魔神に仕え、その加護で自我を与えられ、魔神領を支配していた頃、今は古代の魔導戦争で封印されたそうだ。

ケットシー族はコボルト族と似たお洒落好きで、楽器作りの名人でも有るが、奏でる音色も天分の才、剣士としても天才的な者が多いだが好戦的ではない、むしろ平和好きが大半だそうとグレイスには印象として残った。

旅立つときにケットシーの軍楽隊が演奏してパレードして旅立つ。

一方、フロスト族の下に来たアリアベルタは、フロスト族の男女のみ分けが付かず、困っていたとるを年老いた感じのするフロスト族に連れられて、キングの下についた。

感謝の言葉を残してキングの下に入った、衛兵は知っていたらしく、あけてくれてキングの下で一番冷凍から解かされた野菜類を食べ、元帥が来た事とを知らせた。

その後フロスト族の女性陣に囲まれて、首都の話や散々質問され、宴会に至り散々騒いでフロスト族の女性と男性の違いは声音に有る

事を気づいた。

ドワーフの州都に訪れた族長ギムリが部下と共に向かい入れてくれた。

ドワーフの細工技術は見事な物で、特産品として扱われるのが良く分かる煌びやかさだ。

しかし、族長の総督の豪邸は質実剛健、敬語も使わず、昔馴染みの友人が訪れたかのように歓迎してくれた。

「どうだ」

「ドワーフだから髭面が当たり前かと思えば、本当に男女共に髭面だな」

それに族長ギムリは豪快笑い麦酒を一杯飲む。

「魔人が人を助けるなど聞いた事が無い、だが現にそうしている、例えサボっていても」

「何、旅を通して様々な事を知った、収穫は大いにあったよ」

「そうか、元帥、飲もうではないか」

「おうおう」

飲んで食べ、食べては飲んで酔いつぶれるまで飲んで、ギムリは使用人に運ばれていった、全然平気なグレイスは案内された部屋で一眠りした。

翌日、またギムリが飲み始めるのでもはや病気としかいえない。

「ギムリいつもはどうしているのだ」

「うむこれでも細工物の職人の一流でな、大抵執務が終れば細工物を作って特産品にかけている」

「売買ではなく、かけているとは」

「つまりだ、最高値をつけたものが買う仕組みだ」

「なるほど、そういう仕組みも有るか」

「それでは朝食を食べよう」

一方、ケットシー族の州都に到着すると、お洒落な長靴を履いた、立った猫達が歌を歌いながら楽器作りに精を出している、昔人間が作っていた商会もある、多種多様な種族が混雑して買い求めている、族長の下に付くと寡黙な150センチ程度のハルフェルトが歓迎してくれた。

フロスト族に次いで寡黙なケットシーが歌を歌うのは珍しく見える。

「女王陛下、どうでしたか」

「州都は驚くは寡黙なケットシー族が、歌を歌いながら楽器を作り、商会を打ち立てるなんて」

「実を言つと我ら虎の民は人見知りか激しいのだ」

「そうなの首都では黙っているから、そうかと思つた節もあるけど」

「有翼族は、我々を猫目虎科というが」

「いいじゃない虎なんだし」

「うむうむ、女王陛下は分かつておられる」

再整備計画の二年目で大抵の州都には首都からのレール網が作られている為に、商人の往来が激しい、貴族が居ない代わりに族長達が貴族に近いが、貴族と違い横暴はせず善政を尽くすために、連邦王国はかなりの国力を蓄えている。

第十章旅の終り。

第十章、旅の終り

ギムリの酒盛りでのみ過ぎたレイグスだが、有翼人の州都につく族長代行のハルバティが向い入れた、冷静沈着で腹芸も出来る切れ者のような感じの女性。

外見は武官としての凜々しい風貌に女性ながら筋肉が痩躯な有翼の民を超えている。

有翼人はまだ未整備な地域に住んでおり、灌漑で水路が出来ており山から子川が百メートルで一センチの勾配で流れる。

主な産業は科学製品で、魔導士が使えない部分を補っている、彼らの主な産業から工業排水はかなり慎重で、法律で厳重に管理されている。

エルフからの魔導的知識も豊富に受け継がれ、一番先進的な州になっている。

鉄筋コンクリートの建物、石材を豊富に使った路面、様々な汎用的な技術、実に感慨深い州都で、服装も変っていて羽根を出す穴の開いた白衣を着るのが一般的だ。

その他にも学問に通じエルフの知識を上回る専門家も居る。

一番知識人が多い種族で、エルフ並みの長身に痩躯、屯田兵として訓練を受けている者は筋肉が付き、飛びながら弓を放つ飛翔兵として活躍できそうだ。

「元帥殿、有翼の民の街並みはどうでしたか」

「非常に有意義だ、科学の研究所、学問所、科学と魔導の融合研究所、科学的知識の伝達色々勉強になった」

「それは良かった、リース族長が宰相になって少しは変わるかと思っております」

「実際変わるだろう」

「問題は工業排水ですが」

「魔導の魔素から水素に変換して、工業排水を浄化する組織を作れば良い」

「魔導とは楽なものですね、我々科学者が必死に考えても出来なかった事を可能にする」

「魔導士が考えなかった視点から物事を観測し曆を作ったのは有翼の民だ」

「魔導と科学が融合すればどうなるやら」

「一大革命かな」

「それは有り難い有翼の民も喜ぶでしょう」

「ただリーナがどう出るかが問題だな、予算には限りがある」

「科学は資金と素材が必要だから金がかかるから問題ですな」

「こればかりは巫女さんと宰相の技量かな」

「失礼ですが、女王陛下と呼ばないのですか？」

「大抵の者はそう呼ぶが、昔の馴染みでな通称が巫女さんなんだ、もうそれを言う者は十万程度だか」

「随分多いかと」

「何れエルフの比率が下がれば大した事無い通称さ」

「そうですね、我々のような150年も生きない者にとっては、到底真似できないモノです」

「他の種族は70年だ、長くても80、フロストは不老だが」

「中途半端に長い十八で成人し、残る100年以上を生きる」

「短命種というより中命種か、それはそれでいいんじゃないか」

「エルフならまだ許せますが、フロスト族が不老なんて、見分けはつきませんが」

「それは分かる気がする、声音で違いを掴むのに苦労したよ」

それから異種族のことで盛り上がり、今まで旅したことを話、バルディ族長代行は興味深そうに聞いていた

翌日の別れ際リース様をよろしく頼みますと深深とお辞儀をされた、その後微笑していた。

レイグスが去った後アリアベルタが現れたので大混乱、が女王と言っより今までの経験から混乱を押さえるのは上手かった。

族長代行のバルティは、明らかに気に食わない雰囲気でも対応し、部下を困惑させた。

ハイエルフとして長年生きているので「若いなあ」と胃って色々説明してくれた。

その中には今までの旅の中で得た、調理法、食材の使い方、これからの仕組みの応用を説明し、国力のほかに庶民が食べる料理の改革に乗り出すと。

バルティは不満そうだったが、昔話を聞かされますます気に喰いませんと言った顔になった、

それがますますハイエルフの巫女として過ごした時期を思い出しているいと説明してくれ特に手料理に関してはこれが無いとねと代行に伝えた。

代行がお互いに手料理を振舞いませんかと申し出ると快く受け、困惑した代行だが一人で料理を作って出した、手間のかかった肉料理がメインなフルコースと

白いホカホカのコッペパン、バター、ホットミルクで料理人に食べさせたら、女王に軍配が上がった、質素でいて一つ一つが美味しいと、実際代行も食べたが勝ち目が薄いほど美味しかった。

「さすがに料理では負けないわよ、伊達に鬱憤晴らしに料理作っ

てないから」

「嫌な理由で作られた料理に負けるなんて」

「料理なんて全種族共通じゃない」

「うう勝ち目が」

「基本的に無理よ、魔人の子供として迫害される事を恐れているし」

「さらに遠のく・・・」

「まだまだよ、外堀から埋めていけばいいじゃない」

「そうか、って何で説得されているの」

「落ち着いて、いい大抵の男は顔、後は攻めて勝機を勝ち取るのよ」

「うーん、なんか丸め込まれている感じ」

こう話すとガールズトークのようなものだ、後は他愛も無い女性同士の会話、それに料理を審査していた人々は去り、料理人が料理を運び珍しくリアルベルタとバルティ族長代行は個人的な友人関係に至った。同じ目標を持って

コーンスの州都は活気があるが有翼人と同じ、白衣を着たものが多かった種族としては長命で400年生きる、その為有翼人の科学、エルフの魔導を学び医学の発展に尽くしている。

ドワーフと有翼人の都市を融合させた州都、質実剛健でいて合理性に飛んでいて高層な建物もある、まるで別世界の様に思える。

コーンスは冷静そうで知的な印象が深いのは有翼の民と同じだ。

コーンスの街並みを堪能し、料理を食べ族長の下に向かった。

コーンスは額に角があり、白衣が良く似合う、族長は違いお洒落な衣装だった。

「お若いな」

「確かに若い、しかし能力は別です」

「違う能力の上に贅沢がある、どの種族の族長も贅沢には限度を設けていた」

若き族長ナルディアは「ククク」と不気味に笑い次第に大きくなつた。

「贅沢も華と申しましょう」

女性のナルディアは不敵に笑う、豊かな猫科の肉食獣のような女性だ。

幾度か話しわかった事は taxation から流れる資金を循環、要すれば経済を理解し優れた経済家。

少し不気味だけど立派な経済家と印象に残った。

「すみませんが、血液をもらえませんか」

「はい？」

「血液です」

「要すれば血ですか少しだけなら」

「それは良かった」

また不気味に「ククク」と笑い、医師が注射器と呼ばれる物で血液を抜かれた。

指示を出すその姿はまさに医師だった。

さすが放浪の医師と呼ばれるだけにある。

医学的興味があるらしく、夜遅くまでひたすら医学的検査を受け

た。

レイグスとしては言い様の無い不安に駆られたが、これも異文化交流だと思い押さえた。

翌日旅立ち、食事中も医療の話で困惑する事が多かった。

さらに翌日、アリアベルタが現れた、困惑するほど料理店でレシピを貰いながら観光気分で、食べ歩き、本当にエルフかと思うほど自由奔放だった。

族長のナルディアさえ圧倒する、若い娘の様に多弁で活力に満ちていた。

カエル族の州都が一番貧しい今までの街並みから考えられない見事なまで粗末な木材で出来ていた。

カエル族の族長ライタは暗い顔をしていた、カエル族は短命種で兵としても弱兵で唯一沼地、水辺、水上、海上での戦いが最強と呼んでも差し支えないほど強い。

「どうしたライタ」

「海軍では無敵だが、他の州と比べあまりに貧しいために民が哀れに思えて」

族長として最年少の16歳、カエル族に階級は無いために族長、元老院の間で政治が進められている。

「知識は力なりという言葉をご存知か」

ライタは難しい顔をして悩んで末に

「つまり教育をしている今だから学べと」

「たゆまない強い意志と努力のみが、唯一希望を掴む可能性だということだよ」

「少し希望が見えたよ」
「なら今までの話をしよう」

コボルト族の織物、器用さ、コプリン族の農作業に適した腕力に、力強さ、フロスト族の素の魔導士と氷菓子、ケットシー族の楽器作りと名人に商会、天才的な剣士の多さ、ドワーフ族の鍛冶屋、手工業の巧みさ、細工物の良さ、強さ、有翼人の科学技術、魔導すら科学と融合させる知性、コーンスの医学的知識と長命さ、そして医学への飽くなき発展の貪欲さ、カエル族の強みを話した。

分からないところは質問し、わかった所で次の話をする話から若き族長は興味心身だった。

翌日まで会話して、眠りについたので朝、長い夜長だった。

一日眠り、翌日元帥の呼び名グレイスと呼ぶ巫女さんが居た。
カエル族の族長は困惑しながら対応していた、妙に饒舌な巫女さんと呼ぶグレイスが驚くほど。

喋り続ける巫女さんをグレイスが止め、首都に戻る事になったのは当たり前。

首都に戻ると軍師の小言、補佐官の説教、宰相の愚痴、その他諸々の人々の説教。

しかし収穫は尾大きかった。

第十一章。旅の収穫と開戦

女王、宰相、元帥、軍師、書記長の少数会議で大規模な改革が断行された。

女王直轄料理店、元帥直轄商会、各州軍、軍楽隊の創設、9種族合同商会、科学研究所、科学魔導融合研究所、魔導研究所、医学研究所、交配の方式からの品種改良所、軍の改革、兵器開発所、兵站改良所、軍研究所、海軍研究所、農業改良所。工業排水浄化管理局

官僚組織が出来、文官のおかげで執務は激減した、政務の方も減り、楽しみの料理を食べて執務をした後昼寝、時折放浪を繰り返す毎週だった。

書記長の月例月史

二月、各地より料理人が呼ばれ女王直轄料理店を首都、周辺の町々に展開した、最初こそ色々あったが一ヶ月で効果を発揮し始めた。料理本を無料で渡し、持ち帰らせて料理を発展させた。

同時に元帥直轄商会は九種族で構成され、それぞれの得意分野から薄利多売を合言葉に少しずつ利益を出し始め、従業員に資金が払える程になった。

料理店は順調で元帥の商会も順調に従業員を増やし賃金を払っている。

各州軍の創設がはじまり志願制にした。意外にも多くの者が参加し、連邦王国軍の予備役となる。

三月、各研究所及び開発所の建設と人員集め、人員から研究する

作りに変更。

料理店舗拡大各州の州都に支店を置く、軍楽隊の建設に乗り出す音楽好きな種族の者が志願し、軍楽隊を陸軍に建設、海軍、水軍を発足させカエル族の戦士が多く入り、ウッドゴーレムの漕ぎ手にガレー船と帆船を組み合わせた、ラ・リアルと呼ばれる船を造船に着工。

四月、工業排水浄化管理局が発足、各地の工業排水を浄化中。

現在のところ国庫が厳しくなるほどの資金を投じて九種族合同商會を発足、各州の総督の直轄にした、いずれは民間に渡ることになる。

五月、交易が出来ないために国内で生産し、国内で消費するしもなく、五十万を超える子供から農業大臣など役職が増えた。

六月、薄利多売が受け首都で元帥直轄商會が大きく飛躍する、それに併せ各州の総督直轄商會でゴタゴタが起きるが、それぞれの族長が解決し横の繋がりを重視し始めた。

七月、女王料理店は各町まで展開し、それが村々まで調理本が行き渡り、食生活が豊かになる。

八月、海軍、水軍が発足し、建造されたラ・リアルはそれぞれカエル族とエルフの友好から海軍旗、水軍旗が飾られた。

九月、有翼の民が脱穀機を開発、農業分野に幅広く浸透、知的財産権、特許制度を創設、脱穀機が一番目の特許になる。

豊穰祭、どの地域でも祭り騒ぎ、様々な酒が造られ、一番多いのが果実酒、二番目が麦酒、三番目が蒸留酒これは高級なために一部の人に受けている商品。

十月、問題が発生、どの研究所、開発所、改良所の客観的にエルフが多いと言われる、実際の所人口比率から多いのは致し方ないことだが、種族差別とまで行かないもの、今後の課題になる。

十二月、訓練開始から早三年目、翌年で四年目、寒い中連邦王国から各家庭に生もののケーキが配られる、一年の苦勞を労い新年を迎える準備のためと記載されているが、実質的な女王からの個人資産の切り崩しと、子供達に一年に一度は甘い物を食べられるように、恵みのような物だと思ってもらえば幸いだ

首都に族長達が集まる建国記念日の八年目、五年計画が終り、ついに開戦に至る。

戦力、エルフの弓兵隊、魔導兵隊、魔導戦士隊、ペガサス隊、コボルト弓兵隊、ゴブリン、ドワーフパイク兵隊、ケットシー剣士隊、飛翔兵、コーンス衛生兵、カエル海軍及び水軍の総数二万。

各州の州兵、自警団、予備役の屯田兵の予備役十五万。

「今年は皆さんに凶報です五年計画が終り、ついに開戦に至ります、これから辛い事があるでしょうが、元帥を信じて戦争を潜り抜けてください、戦時下物価が高騰しないようにしますが、皆さんに良い年である事を祈ります」

珍しく砕けた感じのしない凜とした印象のままに女王だった。

続いて元帥の番になる、戦争嫌いなのは良く知られていることで開戦の事を口にしたのも元帥であるグレイスだ。故に元帥としてなるべく死者が出ない戦略、作戦、戦術を駆使するのが望ましいとグレイスは思っている。

他の族長も開戦は延期したいのは山々だが、魔神王がどう出るか

が問題だ。

「皆様、残念ながら開戦を致します、戦は嫌いですが魔神王を放置しておくわけには行きません、次第に勢力を伸ばし抵抗する各種族を倒しております、残念ですが開戦は避けられませんが、皆様がご理解すると思われまます何れでは有りますが」

いつもの碎けた口調から丁重な口調に開戦するしかないと言葉に、首都の庶民は微妙だった、困惑する者、頷く者、泣き崩れる者様々な対応を見せた。

族長達も厳しく硬い言葉を並べ、本当に開戦する事が庶民にも伝わったようだ。

直様、軍議が開かれそれぞれの族長が並ぶ、族長「士官と考えると良い。」

「猿人、竜人は比較的友好的なので可能な限り味方に引き込む、

不幸中の幸いなのか、北部は凶作と聞く、食料を巡って争うだろう」

「そこに食料を交換条件に味方に引き込むわけか」

「そう言うことだ」

「残るはオーガ、オーク、イエティ、アイスマン、内イエティ、アイスマンはフロスト族に説得してもらおう、残るはオーガ・オークだが情報によれば、トロール、睡魔族、飛天族、魔人族を魔神族が支配しているようで強い者が支配する事になれているようだ、そして魔神族だが純粋な魔神族は二人、一人は人間からなったそうで、王都には人間族も少数ながら生きているそうだ」

「元帥殿何処でその情報を」

「内外諜報網組織を近年立ち上げた」

「そうですね、厳しい戦いになりますね」

「実にな」

全員が覚悟する中で元帥はにっこりと笑い、場を和らげる

「飛天族は強い者に従うそうだ、だから一騎打ちを申し込んだ」

全員が凍りつく、今元帥を失えば連邦王国は瓦解する事はないが、苦しくなるのは目に見えている、それが分かるために凍りついた。

「もちろん相手の一番強い者とだ」

「元帥殿、いくらなんでも無茶苦茶では」

「無茶苦茶でも一騎打ちで戦力が増えるなら喜ばしいではないか、なあ巫女さん」

「全然嬉しくない飛天族は男女共に美形の有翼の戦士、敵が増えるじゃない」

「いや味方が増えるのだが、敵は減るぞ」

「いや増える」

「なあ巫女さん、会話がかみ合っていないんじゃないか」

「そうね、まあ続けましょう」

「いいから一騎打ちの話の続き」

「これから始めるすでに国境付近に居る」

「何故報告がこないの？」

「ああ国境付近でテント生活を送っている、害は無い難民と思っ
ていてるようだ」

「平和ボケね」

「あつちが戦ボケだ」

といった具合に役割分担をして敵軍の切り崩しに図った。
上手いくいくかは別として

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1486ba/>

智将の平平凡凡の息子

2012年1月12日00時48分発行